もっと詩的に生きてみないか

きみと話がしたいのだ

田村隆一

もっと詩的に生きてみないか

GR 30

きみと話がしたいのだ

田村隆一

もっと詩的に生きてみないか
——きみと話がしたいのだ——
昭和五十六年三月十二日　第一刷発行
定価　九八〇円

著　者　田村隆一
発行者　江口克彦
発行所　PHP研究所
京都市南区西九条北ノ内町一一　郵便番号六〇一
電話　〇七五—六八一—四四三一
東京事務所　〇三—二九五—九二一一
印刷所
製本所　図書印刷株式会社
© 1981 Ryuichi Tamura Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取り替えさせていただきます。

もっと詩的に生きてみないか　＊　目次

I きみはまだ若いのだから＊7

肉眼の旅・9
青年の旅・15
詩人の窓・31
地獄の見世物・47
性的経験・60
本をめぐる対話・76

II 詩と言葉＊99

反古典のパワー・101
路上の鳩・113
ぼくの苦しみは単純なものだ・131

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

街をつくる詩人・143

III 街角にて＊153

少年の夏・155
湯からあがったら・159
町と村・164
家・167
小鳥と鐘の音・171
半七捕物帖の世界を歩く・174
村の報告・178
詩人への手紙から・180
スコッチにはハギスを・184
新走り・187

酒の休暇・189
詩神・192
Qについて・197
Monologue・201
初出一覧＊218

もっと詩的に生きてみないか

I　きみはまだ若いのだから

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

肉眼の旅——青春へのプロローグ

もうこれまでに
いったい　なんど白い紙に
ぼくは署名してきたのだ

鉛筆
クレイヨン
Gペン万年筆シャープペンシル

生れてはじめて
筆と硯を買ってもらったのは

雪の日だった

たぶん
昭和四年あたり
祖母に送られて

ぼくは仰高西尋常小学校までの道を
歩いていく
雪と泥で

道はぬかっていて
以来
署名してきたのさ　なんども

何千何万と署名してきたのさ
画用紙の裏

答案用紙

はがき

手紙

夏の日記帳

商業英作文

軍事的ノート

極秘電文

むろん

領収書借用書利息計算書トラベラー・チェック

祝儀不祝儀

そして　ちいさなもの　あのちいさな白い紙

言語の細い線　暗い海峡　一篇の詩のそのすぐ

あとに

――「白い紙」

＊

人の子は、母国語のなかに生みおとされるや、産みの親か育ての親の口うつしで、母国語特有の癖をのみこんで、その土地の言葉のリズムによって、泣いたり、笑ったり、怒ったりすることを習得し、やがて小さな「自我」の所在をつきとめると、残忍、愛着、悲しみ、親しみといった高度の感情を、無垢な形で表現するようになる。

また、生理的な視覚が、物を見る「眼」に変化していくのだ。眼があるから物が見えるのではない。物の見方を習得することで、はじめて遠近法が生れ、海と空の識別が、肉親の顔が、太陽と月と星が見えてくるのである。それから友人、教師、恋人、隣のおばさんの顔が、やがては社会的政治的人間像が識別できるようになる。

その代償として、物そのものを見ていた幼年期から少年期を脱すると、精神と肉体とがいちじるしく不安定な思春期を迎えることになる。

その微妙なアンバランスを支えてくれるのが「観念」で、観念は増幅しながら、青春が諸君の頭上に襲いかかってくるのだ。

観念的であること、行動的であること、直接的であること、これは、むしろ青春の特権であり、人生における唯一のチャンスと云っていいかもしれない。

その特権、そのチャンスを生かすも殺すも、それは青春の選択である。

そこで、ぼくは青春に旅をすすめてみたい。

人が生れ、成長し、老いて行くこと自体がぼくには旅と思われる。

未知の人とのふれあい、未知の土地へのあこがれ、そして人生経験をつむにつれて、未知なるものの「顔」もちがってくるのだ。

青年が旅をすることはすばらしいことである。できれば村落をおとずれて、固有の自然、固有の共同体にふれ、その土地の言葉、習慣、衣食住などを、自分の目と耳と舌と手で経験するなら、はかりしれない恩恵を受けることだろう。

現代は交通機関と情報網の異常に発達した時代である。しかし、ジェット旅客機や新幹線の窓から、いったい何が見えるというのだろう。

しかも、ほとんどの人がカメラ持参なのだから、カメラのレンズは自然や風景を見たかもしれないが、当人の肉眼は見ていないのだ。

旅する人は、肉眼で見るべきだ。カメラには詩が読めないが、肉眼だけが詩を読むことができる。

車窓という額縁があってこそ、風景が生きてくるのだ、ちょうど絵画のように。
未知の土地、未知の人は、もしかしたら、ぼくらの心の中にあるのだ。

＊

きみの前に、一枚の白紙が置いてある。
きみがどんな署名をするか、
ぼくにはそれがとても愉しみだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c